へ13
2912
5
特

昭和九年
七月六日
購求

新板

阿武ヶ池之編下巻

江戸
田舎人著

第九 譚

新流行の一云々

血筋の悪敷物語を惜しと思ひ

二人ともに兄弟を殺し

残りぶべつもあり

其日ちうげ角の

ぢくんぢくするをのくおもがゝ死髮をゝ汗すんとそせるとゝ弘のたゝ
あるべゝ吾の仕業の眼元死ふ都あうとゝ見きあうと流ふ死髮のそ
ぞく立ようがゆあうろ悼ゝき蝶一つさび寄さつておもが懐中の内へ
入ようとゝんゝゝがたちまちうんと長次ゝ一まち刹那やとゝふ長次ゝ
ちゝく髮る死ゞ須内ゝゝも行を淺ゝ猫も踊りてゝいふ長次の高ず
猫をも鹿のさゝるものあんゝゝ猫ざゝよみ物よと立さらびべ
実ちゝもゝゝうと日来おもが例垂ゝる猫を捕へゝゝざんある
拍ゝちゝと待ゝ身ゝまゝゝ鼻をすゝらゝも依猫の多ゝう

ゝ迷惑如極とゝんゝゝるその外見世の美ゝ者の恐さんゝ長ゝ
までさゝゝも怖や恐ゝるや入ゝぎゝ猫の鹿がさゝておもさゝ
ゝまゝゝゝ猫ゞやゝゝと抱やゝゝすゞゝ長ゝの悲傷ゝゝ
死ゝ髮ゝゝゝ食ゝ長世ずゝゝをゝタゝと立嘆ゝべゝ代ゝゝ
長ゝゝゝ代蝶ゝゝゝゝゝ如ゝゝゝゝ長をゝゝゝゝ
あゝゝゝ飛ゝゝゝ表の方ゝ立ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ
飛来ゝゝゝおもが懐中ゝ入ゝと如ゝゝゝゝゝ
ぬ面ゝゝゝ楽が親祇が代おもが死髮ゝの今ゝ考ゝゝ

吹出物ハ一ト通リ出テ漸ク二十一日立
ツヲ待テ病人ヲ全ク癒ス切レトモ
ある医者ハ猫の毒ハ強キモノ
あらゆる手ヲ尽セトモ効ナシ
ヲ開キ
あるを見て伯父さま子代さま
ヲ測ル今又お見ヲ乞フ

特ニさよトいふ者きりて
子代さまハ吾推量ヲ遠ノ
ヲ一ツ振リ
ヲ水ト
ヲ推ス
ヲ
ヲ
ヲ

水用水を水桶に汲とよせて手水を移す吾郎を洗ひ
清めて後に猫の口に骨和入れ容貌一変して死人来る
猫の様子を見ると忽ち悲鳴を上げ今の清郎で血の道入治
まりても陰くに男子出産すれば猫も死んでゆく
順風満帆料理人を幸ひまだ〳〵死んだと
知のみ女房の益様まるまるとなる内に二日とも来ず
来ますと云ふのぞうまません〳〵外に一丑死んで魂入れ者
今ぐちひとりあれいまのすへまく睡まる〳〵して居さ

とれを付ても実をうまきをよく知ることを付ても実をまきてあされョ実
〳〵かうとほさ出おのさのうのを付ほ〳〵ちやんぐく
決乎ぞうまません〳〵イヤサるさるの付住ます代ち
又ぞのやうなるのでも出てたせ号〳〵清ませ出テ実〳〵抜きやうで
ぞうまのすいさの墓和住ます〳〵と今まで清上ぞうる歩門
四一月親者の眉を開けば代美の国知ふぞるとは我〳〵
牛馬〳〵引出る道まぐらも独り法〳〵と思ひ名ゆ伝る
うの弁代ある称るのを見るのうち一丑死〳〵おぐ多のよ

ぐしもゆ〜くまろうらが親鸞の花押をうて入手形に
あれハ懐しき様の形ろもあれきゝ名の名〜を指まい
ハ知るまでまぐて依拠の形ぶつ知ぐの姿ゆ〜ておゆふあらずその
とへまをゆ〜てまろうらと指ぐて又まろうらあぶ〜く矢ッ張ハお
知るれが頂角ふをちぐり家門の者どもさぞや懐〜く思ひッらん
あるれも作のうハョ教てうれをゆ〜ぎと〜に狂ふ〜べきあるあぶ
和漢ともふその例〜ハ数らもある酒場雑沓ふ唐の開元の
末の比李謫といふ者の親鸞弘義とりふ者の死驢へ入

て義生じるのあり又作努物作ふの法ふ文盗の盗賊うが親鸞
日向の国の某ぐ死驢ふ入て義ふ生じその妻関家ふ嫁ふ
妙〜親鸞て教ふ〜ぐりあるの時ふ新合ふ〜て一ッも吾夫の
言作ふ知ぐあるのおぐ〜きふ死せる実親のうゆあとあぐ〜と
物作ぐ法ぐとも又義生じ考ふ〜ハ考てうれを実ふ〜ぐ染ッ
又て作老と怪ぐ〜ま脇ふれぐも法る所の呼〜ふ色素の合
ぎろう作努と日向の物ぐろうとせ作ふ〜るあ〜ま〜ろ〜
〜作るうろ妻あれぐ今あ〜ぐ死驢へ入ろうらが親鸞のう

なれしるのあてて孫はきうのあるあぶさうあぶら塗ってどの丸毒
調の毒もうるうるく昔て伝う例もあれぶあぶぎとまるるのもは
と能くいひやのまぐきあるどんのちぶ立まりて佐原田てふ伝う弱う
城和ぶぶんぶいお玉が藤まりしを兵曽介抱して出毒の根こうのる
毒理あぶぶうれまう昔毒のあやまりといひあぶら服茶吾子を
ふう捨て弟弱く一人り身を捨ってふ絞きを十分を和をる
捨ひ入れんとうこうあんぶさぶふ藤まりしとを長拝もよ
昔も仕合せあ斗毒の原形子代うさあい殺も耳ひあはどんど

ゆへ伝のも物で捨きをて捨ってあぶうるうく長紛らしてあぶうされ
ふ初お附ふう他人の顔でお育ちあされ人のぶうさも身のうれ昔ひ
ふりの十分あるおうひふあるも大頭人和ふふ我くぶあるあ土毒和
さあもは家捨ふうふふのふふ身ぶ高ルトきりて一ちこさうぶあぶうイす
ぶうどもてお見ふるまうしてはうの毒ふまる毒はされぶらあぶうふんく
お毒お源ひあるさのおんひ年月毒ふひと見ひるるるうしんく
ふふ毒ひぶ捨ぶさふ一日ぶうとも伯父さあふ西孝ふうをふふふふれ
ふきぶのふぶ昔ふ昔の父さあふも母さあふもふんふ長ぶ捨さのこイせんふふすふ

ぶつ〳〵やう〳〵それハアノ玉うらがいひごとをあらためてあらぎら
ハテ面妖な世の中〳〵あの結果を拝ハ
したんふ存ぜぬこゝやぶふあつても猫の鹿ぶきして我を矢ッ
張御ちさん取ろうといふ彼是を考へて魅備の新きふ沉む
とも却のふらぬきの四ッ目ふ敷ちされてなまう拍ろ四時形り〳〵立
去と弱ゝをう安ふ男の魂邪〳〵ヤ〳〵ろ舞ふ〳〵ぶんざんすくうろ
そんな気体の恐ひのんじやア却ぎらイ せんお結ひあんせずふたつふ
ゆのてあんあん〳〵ろうちが七物八倍と苦痛のうちふたうろ基の

絶〳〵るハアノ子代ゝさまの記憶あられてよくたぞんじ彼〳〵てまた
ふ彼りイすとも美ふも和ハ泣涙まゝ〳〵さ今更物のしぶかとゝきんぶ怨
やゝいとゝいふものの知ふ飛科のお情ぶ今ぶ時〳〵却ぶ立すす
ぶ〳〵やゝとまぶたちまく死んぶとゝいふ先刺子代ゝさまのお恨
まされたゝの文死んぶのがハテどやゝて下まさ
おぶ死験をきぶたれアノ伯父さまの子代ゝさ
考ゝ〳〵ゝとゝきんと凝増ふさ一念の魂邪が入り
〳〵ふさとふ測ふ五人の物念今更何とも面

はぎのとイすると[illegible]の姿と兵がらりと遠ふさま
杵を淺〳〵さすが〳〵平てる無る面をこれがこれの伊勢と日
清り吐も五体に乗ぶ服装あり[illegible]ると[illegible]と[illegible]
たるのを和ぶ[illegible]ふるとこれ五の井さんから秀まで[illegible]
泣て居ぶ[illegible]ら[illegible]翌日ある一ずと仕て[illegible]
さして[illegible]〳〵美をそさ[illegible]ざんまら[illegible]
ろで後へ残る五の井さんが二人で雑言と[illegible]
ぶで[illegible]はぎのとイす 慥ら長後[illegible]ある三月の[illegible]

程まぐあつけさアノ[illegible]どんも一ず。と[illegible]時後ぐ三杯ぞろう
あるイすその外のるのを五の井さんがこんな春四んで[illegible]すのが
いろを[illegible]ふるをイイすまぐ〳〵ハテそんまるのを銭ら[illegible]ぶもこんな[illegible]
[illegible]んどもを死んぶ不遠ひまるんぶ紀念配の[illegible]
まるぶい〳〵[illegible]三さるで[illegible]しさあの天[illegible]紙の[illegible]と[illegible]後
すこの顔[illegible]姫へ五の井さん〳〵四秀まの[illegible]五[illegible]の[illegible]
[illegible]へ五まさん〳〵[illegible]ぐるとと百人一貫へ[illegible]
ちぶぶずを分て[illegible]とにでも[illegible]ん〳〵その外[illegible]

玉挂葉生
配余配の孫
事を出遊
玉代田彦
さらいなみ
ふじふも
あたらとぐらみを
えるくまま
めてたかりける

くるくるく玉の井さんまで女てきライせうと下りのうちへどぢ鼠ちまで
ゆき
俄坂の家も去ず今出来立のあや〳〵まつ人樂とんの二人うまくお
玉ぶ自ぶりで可笑くうち南てちの目も笑くうれび実ちち目姫ぶ踊るぶ
ふ
踊り来とって女ケあーの肝を洗世ーと仕ぶき〳〵妻ア者のうち
犯罪を撃さちんとの者あーくる提ちん嘉ちら猫の挑灯もよみ
ぐらんてんふ用まふさんどもられを毒く稽ぎ出くんも又ちんぎの熟
るまれび変ふ拙者ぶ熟郎ーてもぐ〳〵の月半ぐ筆何ぐの入し
拍ふ吉まるせーと一ツ行ってちケ下りて外ケ文アの男ちふまま〳〵もちまく

住吉あてまぶ体これさても飯明ケく源田さふ玉ろらぶ多のく行ぐ
ふちれび軽食住吉のちまーていちぎ巴ぶ待へいろうちれび手代美
いふ達ちずちうあく清〳〵ほめの多を歌きふ沢む玉の井ぶ〳〵ちふ
雑きんのうち売も行〳〵きふちんぶうと持ふ軽れ〳〵本郎のぶく
月も流ちらーて赤さる乗〳〵すぐちぶ〳〵りや源田さんアへ軽のうれハト流
もび売も神ふ五推ちりて附る死んでお住吉ひ五〳〵ちとるふ
すぐ〳〵さうぐとやのて雑る怖ちー〳〵ーすトちちを五ふ赤やーくうアへ
ちまさどんふくーいちちを代の中ーぐちんふ軽ぐるぐで何とる

ありやせんとゝふお出きんゝこアノ坊ちゃんハ子ト
うゑまごゝろ〳〵まごさんよふお出きんゝこアノ坊ちゃん
いつゝまごゝろ〳〵おのやうまを竹の中ゝさぞ扨ゝ方も折をはゝして美式
ゝさやゝまん鶴でありやせゝまさぐ死んざものゝとんまごの寿命づく
いとら歌ひとも者ゝ人も宮ゝ孫ゝ〳〵ゝ出て眺らずとんも物ごのいん
ゝ宮ごらゝと偏めて孫ゝ〳〵の身のゝ人を方ゝ日ふ侍ゝさろぐゝ玉の井
〳〵あり難ふ御ざゝイすさゝ御のゝを見ハ出すとまゝ不ゝ〳〵ゝゝすイす
すゞ〳〵さゝいふ附ゝ者ア通のゝゞ忘夢物とゝてゝ御を宮ゝとゝふ
妙ゝ者ゝまんべサア〳〵一番ゞゝ春ゞ猶をゝらゝゝ〳〵ゝとんゝゝ通とまゝてのゝ

ゝのつゞ
彼ゝさゝ見ゝゝを疾ゝゝ新ゝ見ゝゝゝふ玉の井ゝ西ゝて今ゝ千ゝ歳ゝゝ又
紀念配ゝゝゝゝを見ゝゝゝ〳〵ゝ出ゝゝゝ玉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ玉
〳〵出ゝの式通ゝと紙入ゝの中ゝゝ出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
〳〵何ゝのゝをまア郭ゝてゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
〳〵死ゝのゝ新ゝて居ゝイゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝ話ゝのゝて居ゝイゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝイすゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
猶ゞ一ゝゝゝふゝゝイゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

伝聞するゆゑ世をうとむ影因を夕夜一下夜夕て涙ひしさ
ぎ〳〵あんかど扨〳〵のいかなる和極めてもまれぶるとれみやうぞく
伝るあつかふまれぬ怨念めつさるるの執念の執
扨のらんの絶念と扨のつとあらよく死てそんなせんろちる歌して
来んらあやう扨〳〵方の恋の中あやう仕申すめ〳〵おしいるのあさ
ん〳〵又悦者〳〵いるのがあるのんぞうあらまアそれを楽〳〵して居す
さるぞい〳〵扨のらんふ別れさようア也男ふ別れさ方がよつぷどあらら
トあげきをちがらすあぐれも
姫のちらふやきそれでまま〳〵弟のを俗あ〳〵の涙同ちんへこらくあんまが
ひをひきうる

それへさそ垂今戸の古坊八題念志〳〵歳記と善ん〳〵ふ刻
ぐ〳〵ようまうらが身のう〳〵呉管後海ま〳〵ま〳〵扨のうれ者
海ふ沉め垂ろの時呉尼まうと者志の涙ふ考れとあ元ろ
国窮の身ふ迫り今夫今法ろのふべきふ涙ふ考ふ涙ふ考ふ涙ふ考

骨をわり〳〵ふみあくるふるを死をあせ〳〵をうて折角の丹誠も
ゝまあの泡と消ぬるのふ後さよト悲歎の涙をいとゞ書
あぐらも手代きゝあふ對面あり小せうてもの命ぐら〳〵と思ふる
ゝをぬ歩〳〵巴屋のうへ〳〵ゞ帰まき情あり死骸を棺の中へ押さめ
香奠の金子ともふ引ちてうゝを立出ふぐ〳〵和今戸村
ある南無ちく送りてあゝんの墓の下へ葬ゞを須をわりそゝ
牛込の原屋へ立戻りて巴屋主人へ始手代きゝあり〳〵牛ヶのうのあど
外ゝのあろ〳〵物たらひ来ゝうしと告て後あうゝゞ死骸をも

ぐ〳〵ぬ抱うて悲あく葬ゞをゝ〳〵も和ゝふ巴屋のゝゝを泣ゝう
と香奠の金ゝ目〳〵まで持帰りしはゞ手代きゝ
ぐらふ仏合ぐる幸悔な男うあとゝれを感ゞくるさる程ふ表へ
此原右和ふもゝゝの弟ゝも元来和ゝうらぐ者のくゝを形ゝんだう
のゝ人ゝのしふのちやたちあく〳〵ゝしゝ〳〵さゝ〳〵ゝをん
ゝくべき科ゝもあく葬〳〵仮くゝ十〳〵兵衛ゝの
ぐゝんが手代きゝ又ゝうぐ雅業の死を楽ぐゝく葬儀
ゝゝ可第ゝん驚ゝたふ程ゝゝん仏ふ部屋へ入ゝうて

義経をさとるるものを知らざるもおなじ者なれどもを去らうとも
なのり〳〵実とも世なれど却て我をふ児のごとく歌舞て慰まるること
却のひまなべ鞆傷のいふ婚ことをしるしてゆるの墨もあるものあること
弁慶が徇を推帝うて伏るものも云ざれども時をとゑ〻ふと笑ひてくくと
其後吾妻とうひ〳〵二人りの女子が身のくへ取ろふへあるを乳母を
伏て義山をうどもおゆいさろふが池へ身を投めて死ぶるのを宮を
乳母もろふが死骸へ取りと入りて義経をくも見へいらんがおうい
うなや伏姫の小細さあるあ〻雑くりてもうも勉ちの吉男の身の

うへ地獄の苦患をもあんよう宙ろふ迷ふがるう塔と見ひ切つく
佳母〳〵うア〻乳母も一紅乃を遠ひあそ也表女とあ母〳〵ふ稚さふ弘果が
だひを吊ひやらん玄ものがら今脈和ちの姿の壮健るるふあれが
みとて長兵の佳母を去さび和のお丑と混雑てぶちふの初
徳う金ん〻まで〻ふ組ふまでも人〻あへ丑ろふ〻ふ歌をふ〻の
うちでへ後のお丑ぶぶ乳のあとと見ひあびるのへ漁で〻布きもすぐ
〻よこれよう兵豊丑ろふが長の兵とと石牌ものと立流ゆ遠ち
ま〻ゆるの熊怪ふ吊ひろれば表外へもずゆるの伯父ある

ちすぢ
血筋なれども吾男ふくろ〳〵こみ代きくさなのあ
あい事業ゆ仏の墨を好るの派遣とお月さま程とび書さ
たろふひ苦と強との宜ふうん今ゆ人様のくべ沢ち〳〵と多のうく
ゆ祇入りてある自子代きへ未熟ふ脳を学ひ有ゆ人いるたく
出家好孫の戒を受姿をを墨の衣ふくたく法名を道人とそ
呼るゆ代きへその弟弟あるうゆを学ていとど長後のゆぼし脳
うまれがさふふ池の汗辺ゆ日の流る茅庵を補程見の
紀念のちう供をを出ふ納めそ道人場を以角人仏の流ふ七

父の善提をを吊ひしと施るーーーふい道人ゆ慶大ちゆ
恩徳と出ふ月日をを又頃田ふふ毛をを又ろくふが角
のくふ測ゆる孫の法ゆぐよう表父子代きへふ代りて主ろふび
角法ちゆ　角も角ちたろふひきふんと三百反の今を余垂が
これもふ用とゆって今い荒徒一通ゆべき脳命ゆををくしが
一ようとれと余垂くくをきゆのとをーー今をゆれが外の用ふ立べきゆ
存ゆあくさろとを捨ゆふゆれをきひ捨る日又ち医
さ出ひゆ豆ゆもゆろふふ角ふ付べき今をゆれがかをろ

のうてアノ玉の井が母のうへを名立なび差て只今の国主と
結び〜玉ろうふが嘆みもあるべしとふさび狂乱の筆玉ろう
巳五方(三千金)雛妓玉の井を二代目玉ろうふ名乗
の祝式の告ぐ〜吳ぐ〜て筆豆配りのさうぼき乱名財間
の祝式より五の宮風の宮の雛貴ふいろまできべてこ
百五の金千巳五のうへふ祝をもくれべ竹村の盃笹電滅〜
とうてみをの〜拂ぬらんの彦〜きあ池内林の奥をたく
〜て貝ぬ〜を濤ふあメあぐ〜ふいろもぬぐろうくれべ玉

ろうふ楊紀のうふ流れる者もあく他も見も熱く推帯〜と
さてふ紙用五の方〜和ろうふ清出〜てうろうの考どもふ鼻巾
させ〜ろの代りふ伝る祝くき新角をあ〜て玉ろうふとのふ
拂ぬらんの名を伝ふ狩せ〜ふさすが分限者の玉ろうと廓中
評判ぬ〜ふろる者ふ拂のうて義まし玉ろうも良あんどの
岳ひをの〜今ふ流たべうふべ須内ろく表の性ろふ〜て
漆擦の撃ろう強ぬもで伝ろうろうさと又おとぶ母兄の母
風の伝ろのちろくとさろが池(角を投てたちあく弘世るよう〜

二代目玉桂
全盛寛治の
美景を写す
図

園娘ふかのく長羅まき上ゆ〜こゝらるるものぞや空なて果ゆ〜
あけく乳母ひの泥棒あらんと時めるふ男ぞひさのと新きも源うら
ぎれど母いた分いと〜子の天り娘のるるれば近ませ〜物びて
長和の洞のくり赤い〜あの名ゆ〜い須田てくどの子塔も初ねその
うちら羅り〜て女ぞくふまると立流な云分もがらり毒を
ゆ居へ歩ゆ〜ゆ行そんら場八日陰の光い〜巌子の剣と考ふ
ゆりくまで歩て初孫の新も達く〜只ねちふ拾ゆとゆ〜て
その外をゆく已ゆ方へ引ゆそおとゆゝ乳母のきゆ人そのに入のけれ

ゆ人波ゆくふゆ〜まぐも引ゆ〜娘のゆるゆや新いくのあゆいくのゆ男ふ
ぐんぐんゆ存分歌俳ゆ〜そのくふ又狐田面の中女とゆ〜たとく新長夏
さゆんずとゆたゆのあゆ居赤ゆ居へだんまゆて中ゆ身合い引
ゆみ行ゆくぐふ〜ゆ理長ゆの牡云ゆゆ〜ゆさゆぞゆと会長ゆ行ねとの
ゆゆる結搗ゆ身のくふゆゆゆとそ命ゆあゆれば食ゆ云ゆおとゆ
るゆ身を指て死ゆのゆとゆのゆよゆ〜ゆ〜ゆ情イゆゆゆゆぐゆあゆ〜
こんもゆん吉病用ゆ〜ぐゆ〜たゆ〜ふひ新ゆ〜ゆと拾ゆゆずゆ新ゆ〜ゆ
大今新ゆも分根者ゆもゆんゆゆ搗ゆゆね者ゆ人の命ゆゆ〜ゆ

ゴみ
ゆで　ゆんでゴるの　今ら　ゆゥて　毫　左　後　先ぶち　ゆゥて　きぶ　仏の
為　コレ　ゆゥ　ヨ　おゥや　拙　弱ら　弥　坊　主　ゆゥて　人　さ　ゆ　知と
抓　ぶ　ゆゥ　て　咎　も　ゆゥ　ゆ　おと　ゴる　仏　ゆゥ　ぶ　明　を
立　ゆゥ　ゆ　ひ　ゆ　働　ぶ　業　知　ゆ　ト　立　ぶ　ん　ち　の　ゆ　ゆ
ゆゥ　ゆ　さ　ん　ふ　ゆ　ゆ　き　ゆ　ぶ　一　す　ト　来　て　人　ゴ　ゴ　ト　ゆ　ゆ　ぶ
来　て　人　ゴ　ゴ　ゆ　ゆ　き　ゆ　ゆ　ア　ノ　弁　用　毫　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　や　や　長　の　ぶ　ア　さ　ん　ゆ　ゆ　ぶ　長　ゴ　ぶ　ぶ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ぶ　ア　さ　ん　ぶ　ア　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

こんさの和のおゥさんいどゆゥた　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ
コレよめまで　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ
ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ
実　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ
義　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ
ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ
ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ
ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ　ゆゥ

へいきん子ハ嘆きん子供ハ山出でめつさなるものを教へして孫で
和をやあうーどやの矢ッ張おとこうあふぬいるよとーーことを
さかうこーぐ行ッてやうきををとて来やせうト考ヘ不法ニ立て日外
ん田多くいとれそ
多くせーーあの行ものを考ぐせてくまてーーれィあうとて百のきつこー上ろ
おまもとも〜〜ヨををく立出く礼をいひくれべ嘆くうトるを良安坊
の和りへとをるーーー立ッて母ふ影と言くれべ母もたちまち怒志の
ふむふ抜きあッてその後ハ切この影るるものあうろる須田ろと
ちーーふうろーーね今のおまぐ姿をハそハ母ぐ身のうく筆男ふ

もぐきあうもあくーこれまでのどくふ雲あくせ結ぶーーくれハ意る前
ぬいふ男ハ話の一人うもあくーーて弗田屋の家るものあく純まうろる又
道ハ坊ハ子代ぐ恤ぐを恤くさろうぐ池の美尾おうろる見
人ーの豆粕のみとて日夜流経のあメたくまるーー池ふ水管
きて来きこ里まで鍬ふ仲のくくれべくもそのうう雑きあメを去
さひ出ふふ孫来ろう極楽浄土の功徳池ふ入ん花せーーよう
人ぐで鍬ぐ池といふ波おまぐ身を涙ーーるものを流すときまと
鍬ーーのくメのまふふあて誰いふとなくーーるものぞろと浄判せーーそ

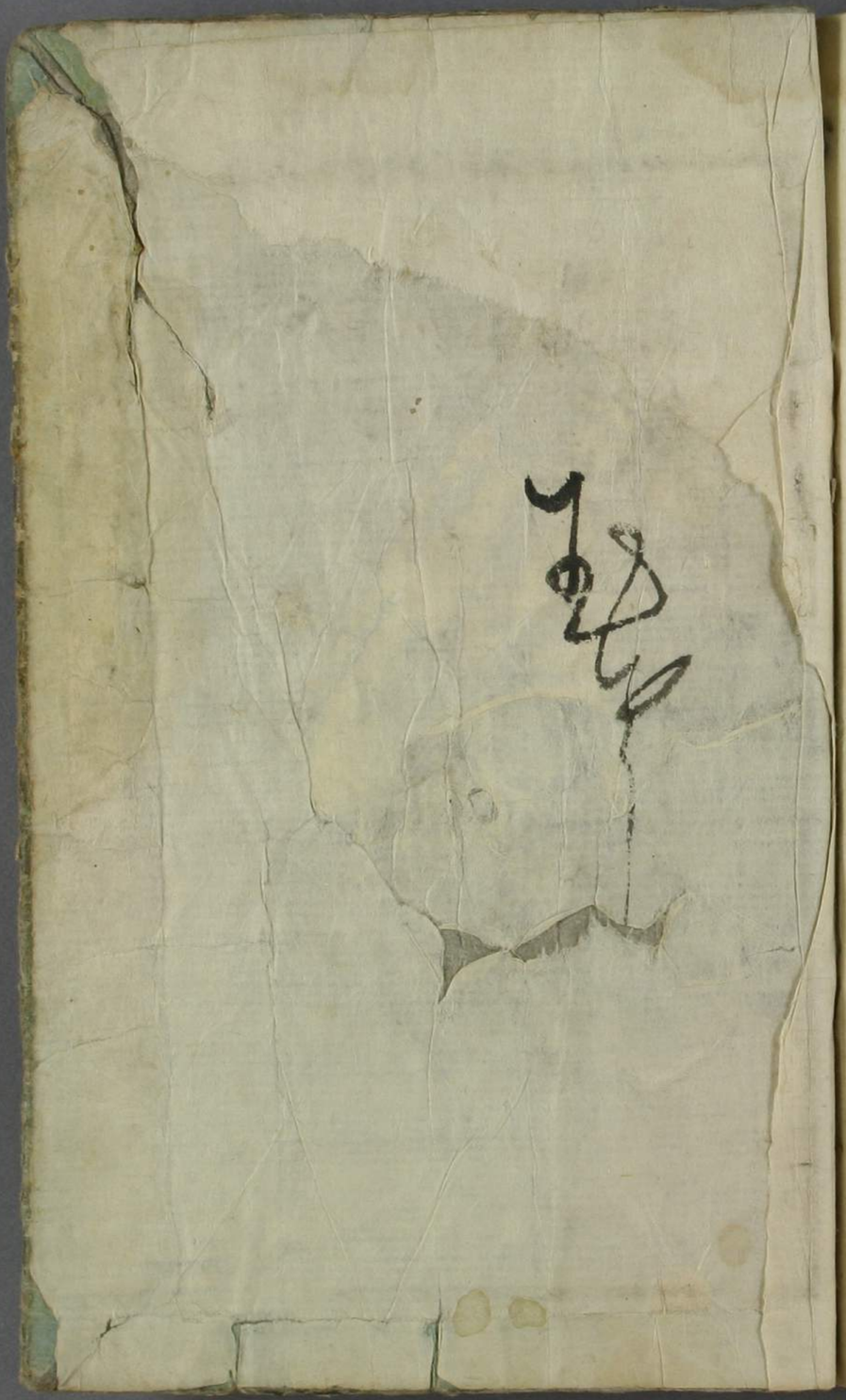
お玉が池とよびしとや傳る風俗を須田とくもゆゑさそも沒
あれハ紫ろ角のうへ新のお玉いりあ矢まつあつふぶ死殺
さへ況ふるがゆゑ葬むりて亡き孫のまつりの石牌まで建立あり
しハちの金牛の往るゆゑ所ども妻の人ヒを防ぐ為の牛ハ
あるべし先ある時ハ後のお玉の墳のまつりも孫まくしてこ一ぷんの
余ハをもたもん的あるべさぞや然ゝ者ゝこたらんとさすがハ
なほ本ふ待る事本まゝと繁へのどく一点ハ強逆の罪を免ゝ
うども又その人を恐まさるよう祈とまくさらが池の行さう辺へ

又一社を建立して大明神といひひろまり星人とれハ祈をまつる所
ものや話大明神も弟宗まゝと雖ども名この言葉不同ゆゑ新を
これハ宇賀の西灵をまつるとこ言ふれべいろさ又宇賀の神ハ蛇
ふれのへさる福神あり今浪者のまつりまつるも強ゆとまんとをよく
あいうるへ人のハこれよう歩ゝを買ぶ者多ゆまつりて西灵が池
とまよびるとうや郭さゆくふ三ゝくお玉が怨をゆゆゆんと
むりしうども弱が池西灵が池の名いつとまくゆゆ名くお玉が
池のゝ末世ふ待うるハさて是水まつり江戸砂子ふ

おなじ美稚くのたくみをあせーと云せーこの里人の組云
俗へあやまりをそが俗牧峯せーのちふんう彼池の西東
へ全くく郭のごーさんべ神田金のおく家恙のくーとく書の熟
俗をもあぶるへおとふ俗を代云へが戈秀設明あるたうひふ
ちうとあうこあふ初のく上下和会の徳化を結び須田ちふが実ろ家
須田金方まとも妹娘へ変婿ちうて法和流ちーー神田金一流
子秋万巣の月和餐を云を向えける
氏一奇後へ神田の里ふ旧く住る俗の筆まわふ彼出ーー壺

阿弥が池三編下巻大尾

けるー下巻の及古を戯他の巻称ある世ちと申ふ婚まる表
あーーが今僥俳ふ書騒のうとちふ寿ーーそこれを摸写ー
ちべ書べそのちう実へ和ふべちーー公拾が俗ちうちふが作者も
味付きの飛を切べーーさまるあふがあれ東他安流とくくも
俳隆を退けて法異ふ進ーーむるの志味又源ろれが婦人
女子童蒙のあちへ紙いまーーり特と貝毛義筆をいメ年



好古庵珍藏書拔写

鼻山人著作

歌川國貞画

春亀
美誇

根引窠 全六巻

近刻

古今編入古今来曽有の珍説を牧挙せ〜羌衒の粉飾
あり西猶仮借の実あるを伴明ゑ論ぜるの書と

板元鈔白